

MCIスクリーニング検査とは

MCI(軽度認知障害)とは、健常者と認知症者の中間の段階を指します。日常生活は支障なく過ごせますが、そのまま放置すると5年以内で約半数が認知症を発症します。いわば認知症予備軍と言えるMCIですが、最近の研究ではMCIの段階で適切な治療を行えば認知症発症を防ぐことや遅らせることもできると分かっています。

認知症で最も多いアルツハイマー型認知症(アルツハイマー病)は、発症する約20年前から主な原因物質であるアミロイドβペプチドが脳内に溜まり始め、認知機能が徐々に下がっていきます。

MCIスクリーニング検査は、アルツハイマー病の前段階であるMCIのリスクをはかる血液検査です。この検査では、アミロイドβペプチドの排除や毒性を弱める機能を持つ血液中の3つのタンパク質を調べることで、MCIのリスクを判定します。

MCIスクリーニング検査の判定について

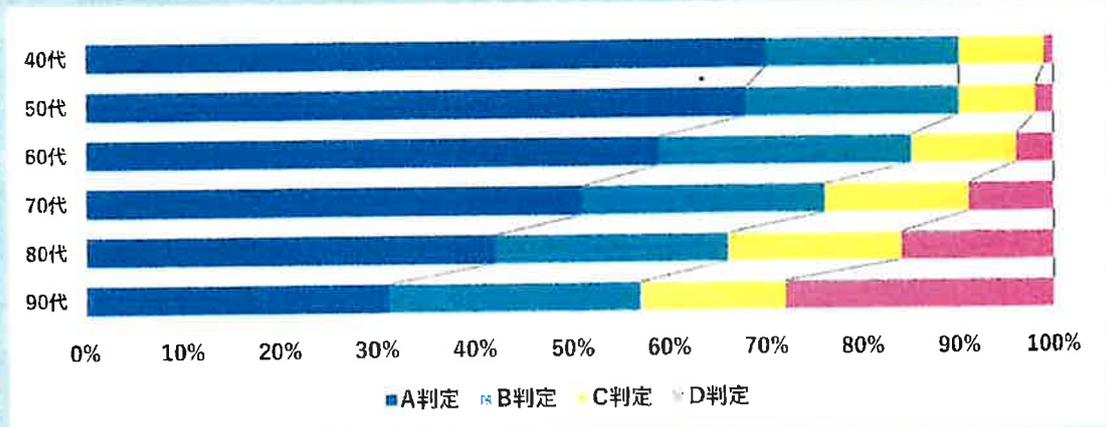
判定結果はA・B・C・Dの4段階で判定されます。

- A 健常。今後も健康的な生活を心がけましょう。
- B MCI(軽度認知障害)のリスクは低めです。健康的な生活を意識的に習慣づけることでMCIのリスクを抑えることができます。
- C MCI(軽度認知障害)のリスクは中程度です。心配な方は専門医による早期の検査・診断を受けられることをおすすめします。
- D MCI(軽度認知障害)のリスクは高めです。MCIの段階でも予防により認知症の発症を防ぐ・遅らせることが可能です。すぐに予防を始めるとともに、専門医による詳細な検査・診断を受けられることをおすすめします。

◆軽度認知障害（MCI）とMCIスクリーニング検査について

MCIスクリーニング検査における世代別判定結果の分布

*当検査受診者約16,000人を対象とした分布



- 加齢に伴ってA判定が減少し、D判定が増加します。
- 認知症は高齢になるほど発症のリスクが高くなる疾患です。年齢を重ねることで誰にでも起こりうる身近な疾患と言えるでしょう。
- 最近では糖尿病や高血圧、生活習慣病も認知症のリスク因子と考えられておりますので、若いうちから予防に積極的に取り組むことが大切です。

生活習慣の改善が認知症予防に有効です

- 適度な運動
- バランスの取れた食事
- 質の良い睡眠
- 趣味を楽しむ

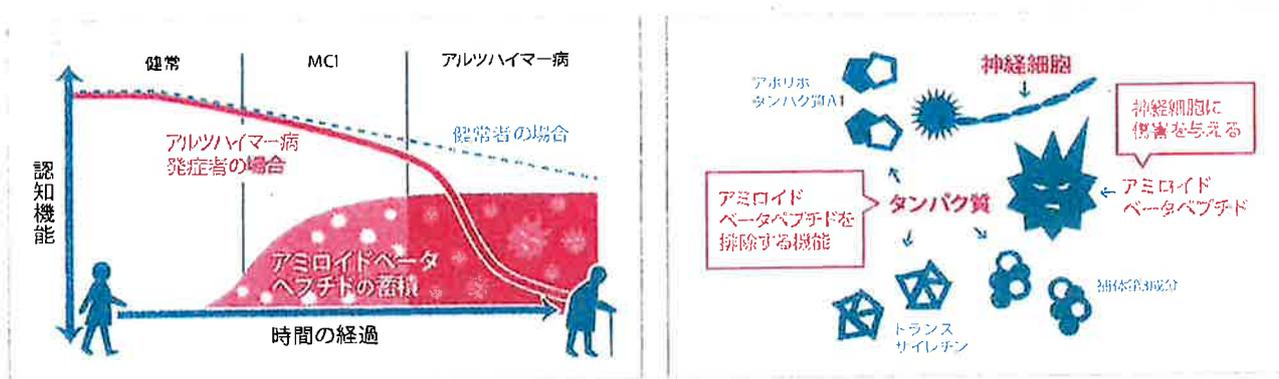


検査結果は予防のヒントです

健康な方でも高齢になるにつれてMCIや認知症のリスクは高まります。
検査結果にかかわらず、生活習慣を見直し予防に取り組みましょう。
健康診断と同じように、定期検査を受けることでご自身の変化に早い段階で気付くことができます。

◆軽度認知障害（MCI）とMCIスクリーニング検査について

- MCIは認知症ではありません。認知症になる前の状態です。MCIの段階で適切な介入を行えば、認知症の発症を予防もしくは遅らせることができると分かってきています。
- 認知症で6～8割を占めるアルツハイマー病は、その原因となるアミロイドベータペプチド（Aβ）が脳内に少しずつ蓄積することにより発症します。Aβは神経細胞にダメージを与え、記憶障害や認知機能の低下を引き起こします（下図左）。
- MCIスクリーニング検査は、Aβを脳内から排出したり、毒性を抑制したり、炎症を和らげるなど神経細胞へ与えるダメージを抑制する3種類のタンパク質の量を血液で調べることにより、MCIのリスクを判定しています（下図右）。



測定項目	標準的な範囲*	説明
ApoA1 (アポリポタンパク質A1)	140-195 mg/dL	ApoA1は、Aβの蓄積や毒性を抑制し、神経細胞の炎症を和らげることが報告されています。ApoA1の減少は、神経細胞の炎症を悪化させるとわれています。
TTR (トランスサイレチン)	21.9-33.8 mg/dL	TTRは、プレアルブミンとも呼ばれています。TTRはAβに結合して、その毒性を抑制します。アルツハイマー病の他にも、うつ病や統合失調症などの精神疾患においてその量が低下することがあります。
C3 (補体第3成分)	0.99-2.86 Unit	C3は、ミクログリアという神経細胞の維持に働く細胞の活性化と密接な関係にあります。C3の量は、Aβの蓄積や神経細胞の炎症状態を間接的に観察する指標になります。

* 当検査受診者約16,000人を対象とした平均値±標準偏差を標準的な範囲として示しています。
一般の血液検査の基準値とは異なりますのでご注意ください。